

京鹿子

京都府立総合資料館
京鹿子
第100号
平成10年3月

3月号

鈴 鹿 呂 仁
拾 掬 集 その三十



塗 椀 の 朱 の 一 つ 増 ゆ 雑 煮 かな
輪 飾 り や 墨 書 の 太 き 志 望 校
神 山 の 淑 気 引 き 寄 す 社 家 の 門
お 降 り の み く じ を 拾 ふ 天 の こ 糸
白 狼 を 待 つ 天 涯 の 梅 一 輪
伴 走 の こ 糸 嚙 り を 引 き 寄 せ て

リラ冷えの空 独り立つ時計台
雪解けの大地はこつと軋みをり
立春の緯度耀へる海洋 凧
下鴨や二川を束ね寒奔る
寒禽の空へ大樹の黙通す
風花や明治は遠き四ツ目結ゆい
別邸の高塀の空寒の鳶
望楼より洛中の寒見極める

(旧三井家下鴨別邸)

— 近 詠 —

草 萌 ゆ る

鈴 鹿 仁



草 萌 ゆ る 神 楽 岡 に も 歌 碑 ひ と つ

う ぐ ひ す や 一 声 そ こ が 仏 み ち

大 寒 や 屋 敷 構 の 軋 み 音

— 追 懐 —

水 温 む 人 と ひ と と の 蝶 番

身 ほ と り の 穴 り あ れ ど 花 固 し

—
近 詠
—

和田 照海

光陰の矢

光陰の矢に追ひ越され日記果つ

初鏡ふだんの顔を納得す

初鷗飛ぶより浮むこと多し

糶桶を平らに叩き寒鰈

へそ島へ柄杓を立てて寒北斗



松本 鷹根



鳶の輪

鳶の輪に眠りし山の
大文字

師走波糺す箒目神の
前

土手夕日冬田に延びし
影慕ふ

白鷹の年酒に卒寿親しめ
り

万両や庭の木洩れ日朱を
点す

近 詠

若 水

実南天添へれば松の凜凜しかり

若水を汲み今生の時流す

初みくじ結びて白き竹の犬

ハイヒールの音蹤いて来る冬帽子

衿立ててふたりの夜道黙つづく

塩貝 朱千

英華採集

天秤の片方は冬遠汽笛

亀 岡 東 珠 生

天秤は重さを量るものであるが、均衡が崩れるとその役目を果たさなくなる。掲句はバランスが取れない状態で片方、すなわち重い方が冬である。名のみ春というが、春を待ち望んでいる作者の思い、心象が色濃く出ている表現と言える。結びの遠汽笛は、作者の胸に寒々と聞こえてくる音か、それとも微かな春の訪れの足音と見てとるべきか？上五の「天秤」に読者の心はどちらに傾くのであろうか。

草々で結ぶ書簡や秋ともし

福 山 政 時 英 華

秋の夜長ともなれば人恋しくなり、無沙汰を詫びながらの文を認めることも多くなる。久しく会わない人であれば尚更、顔を浮かべ色々な事を思い出し、しばしば筆を止めることになる。漸く纏め上げたものは、ややもすれば長文となるものであるが、文の内容を「草々で結ぶ」と表現したところに作者の思いが十二分に伝わってくる。「秋灯し」の季語が、作者を淡く優しく包み込んでいるようである。

独り居の明日は海鼠と化すつもり

赤 穂 大 政 睦 子

冬が一番美味であると言われる「海鼠」。海鼠を当てに熱燗の一杯は、酒好きにはこたえられないものであるが、嫌いなものにとっては気味悪く遠ざけたい代物である。しかし、独り身の者にとっては、「海鼠」となつて愚鈍な一日を送つてみるのも一興である。独り暮らしを諧謔的に捉えた作品として俳味がある。明日の貌は、どうであったのか。読み手の想像は広がっていく。

神麓集

老の春 藤岡紫水

戻ればもとの暗さに冬木立
山国の闇をそびらに牡丹鍋
追はるごと街騒を出る冬帽子
引算の余白重ねて老の春
五臓六腑骨の髄まで寒に入る

水温む 沼田巴一字

春風や林の中の美術館
白れんを布と見てゐる二階かな
紫木蓮彫刻刀の切れのよし
黄水仙ギリシャ神話の王子とし
妻への信もつこと確か水温む

極楽 丸井巴水

北斗の柄立ち新年の神籤吉
極楽のマップをせがむ初閻魔
頭蓋骨砕かれてゐる霜柱
折れ櫛をつかふ女を好きし春
春の野へ誘はれゆきし粥の湯気

年の暮 植村蘇星

望郷のひとらを高む年の暮
そのうちにとは何時の事年の暮
もう未だの言葉の文(あや)や年の暮
省略に切れ字したたか年の暮
足る足らむ心の持ちやう年の暮

神麓集

春近し 北川孝子

一途なるもののもろさよ椿寒む
たましひのずり落ちさうな寒日和
比叡まで雲走りゆく椿晴れ
一陽来福一気走りに春よ来い
大いなる入日どすと春近し

小春日 直江裕子

おぼろげな不安紅葉に置いてくる
柿の木にいざといふ紐たれてゐる
縁側があつた小春日切手貼る
コスモスや故郷に帰る地図がない
さよならは遠い約束 翳雲

大 蕪 高木晶子

魂を埋めにひとり黄葉の道
休み又休み白菜ざく切りに
晴ればれと京にいびつな大蕪
冬三日月欠けた部分は補はぬ
この歳になれば干柿みな笑ふ

柿の火花 伊藤希眸

冬を呼ぶ雨の重たし高速道
枯葉散る幹の傷みを陽に当てる
葉を落し柿の火花よ絹の雲
皿・小鉢割りてもひとり神在月
椎の実の塊りを踏む悲恋かな

神麓集

半世紀 木戸渥子

年送る都のへりに半世紀
千両や振込用紙複数枚
ラツパ水仙ラ抜き言葉は許さない
紅葉といふは楓の更年期
師走のカップル狸うどんと狐そば

岩 倉 奥田筆子

岩倉や密書の気配小鳥来る
怪しきは公家の早足枯野道
どの部屋も満室越前蟹解禁
干綱に冬かげろふのなまぐさき
生きしまま猿の腰掛化石感

蛇 塚 井上菜摘子

冬ごもりのどこで切字を入れやうか
紙幅尽きポインセチアが宙ぶらりん
冬の噴水けふの気分といふがあり
狐火のぶつかつてくる此の世かな
蛇塚のへびへ時雨を置いてきし

女院ごころ 村田あを衣

もみぢもみぢ女院ごころを摺り足に
マツチ箱振ればかたこと冬に入る
実印を真つすぐに押す十二月
口裏を合せそこねし師走かな
寒波来る水平線を切り口に



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

一山の火種の紅葉さがしをり

京田辺 山中志津子

石露明りははの気配の濃く淡く

遠き日の伏せ字の恋よ風花す
鷹の目やきつと地球はせまき檻

日溜りの竜胆きれいな息をせり

未枯るる風の野宿の湯桶読み

枯草に腰下ろし読む放浪記

鱸酒や外山ともしびいろに昏れ

要点を一行冬至の備忘録

金柑を八つ並べてあのねのね

枯草に座すほんたうに背を向けて

京 都 井尻 妙子

本来の無口にもどる懐手

帆の失せしマストのやうな枯木立

まだ一人帰つて来ない晦日蕎麦

抱きやすき白菜ひとつゆるぎ坂

水鳥を追うてこれより湖西線

咲くよりも散つて山茶花らしくなり

門札に父の筆跡梅真白

星ほどに人遠き日やくず湯溶く

京 都 片山 熙子

城 陽 鷺山 珀眉

落葉舞ふ日月の神讃ふべく

福 山 亀井 福恵

人はみな阿と呷の間小鳥来る

川床寂びて水にさすらふ都鳥

秋惜しむ京臍石に触れもして

登り窠寝かせ紅葉の屋深む

句は無窮奥に奥あり冬至かな

晩秋や斜めに変わる風の音

一枚の師走こよみの風せはし

潮騒に遠き日の影冬至かな

鍛冶町に鍛冶屋伝説雪ばんば

福 知 川 西村 滋子

無住寺に忘れ番傘冬ぬくし

石路咲けり晩年の色して咲けり

ひとり居の明日は海鼠と化すつもり

ゴジラ出現ニュースは紙上冬日向

手順などあつてなきごと鍋奉行

柿照るやふつふつと湧く幼き日

和の心伝ふ野点や実南天

篝火花二人の容姿自撮りする

見渡せばサボテンの海秋の空

オアシスで四方山話秋の午後

目ざめれば雪の世界のプレゼント

白一色夜明けにびつくり雪つもる

窓外の真白き朝や雪景色

木の枝のたわわの雪や夜しんしん

漸寒や手の甲見れば齡の皺

凍空に鳶舞ひ上りドローンかな

高齢者運転試験初時雨

無人家の庭彩りぬ実南天

来る年は案じる事なきを祈る

クリスマス心を支へ祈り知る

足元にそつと葉の舞春そこに
冬桜群馬の里を賑はして

赤 穂 大政 睦子

アリゾナ 伊吹 之博

オハイオ 水谷 直子

酒 田 藤波 松山

洪 川 東 秋茄子

亀 岡 東 珠生



天秤の片方は冬遠汽笛

狐火の寄り添う西位冬さるる

曼荼羅の裏を覗きに冬の蜘蛛

美濃柿の熟す頃合世は大平

草々で結ぶ書簡や秋ともし

ゆるみきし鼻緒すげかふ菊日和

福 山 政時 英華